九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

テø/テイルとル/タの対立をめぐって : 日仏対照的観点から

小熊, 和郎
西南学院大学文学部

https://doi.org/10.15017/1654395

出版情報：言語文化叢書. 8, pp.47-70, 2003-03-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

テø／テイルとル／タの対立をめぐって
－ 日仏対照的観点から－*

西南学院大学文学部
小熊　和郎

0. かたちと意味

日本語のテンス・アスペクト基本形は述語動詞[1]に後続する (1) te-ø/te-iru, (2) u/ta の対立形式によって担われている。(1) のペア構成は意味的異同を論じる際にはあまり並べられることがなく違和感を与えるかもしれない。通常は，むしろ u/teiru/ta の三者が比較可能な文脈において論じられるからである。(2) u/ta の対立は，状態動詞を除いて未然／既然の別として普通は捉えられるが，後に見るように，〈テンス・アスペクト〉的意味効果のみならず，〈主体間関係〉の意味効果にも注意を払わなければならないし，最終的に〈概念領域〉のパラメータに属する問題として本稿では把握し直すことになる。

上に述べた通り，te-iru については，裸の te-ø に注目するのは重要であると考えられる。また，形の上からも，te-iru は te- に -iru が加わったものであり，さらに -iru は -ita と対立するから，i-ru, i-ta と分析され -i- の機能も問題になる。また，-te も -ta も同一動詞語幹（連用形）に接続しているので[2]，それぞれの用法の多様性を規定する抽象的メカニスムを統一的に考えることを目標におけば，自ずからかたちの同一性や類似性から論を進めなければならない。

小稿の範囲では細部に至る議論はつくせないので，以下では日本語について上記の形式と意味の関係にこだわり，問題の全体的見通しを得ることに焦点を絞ることになる。他方，このような問題を考える際には対照的観点も必要である。ここでいう対照とは，言語 A と言語 B (C, …) の類似マーカーの用法を並べて，異同を確認するだけではなく，それぞれのマーカーの抽象的働きの部分にまで降りていくことを意味している。「過去」，「完了」，「進行」などの記述用語は，カバーする言語によって内容が均質ではないことはよく知られている。例えば，スペイン語の pretérito，フランス語の passé composé（複合過去），passé simple（単純過去），日本語のタには，おおよそ「過去の点」的表象が付与されるが，詳しく観察すれば発話者との関連では複雑な現象があることが見えてくる。英語の be + ing をスペイン語の estar + 現在分詞，フランス語の être en train de + 不定詞，日本語のテイル，ツツアルを比べてみても同様であろう。あるいは同一名称「現在形」の英・仏語間での微妙な用法のずれに注目してもよい。細かな観察によってそれぞれの文法マーカーのオペレーシ

---

* この研究は，西南学院大学 2001 年度特別研究 (C) の助成により行われた。

[1] 述語のうち，以下では主に動詞述語について論じる。

[2] 母音語幹では tabe-ru/tabe-te/tabe-ta のように同一語幹に，子音語幹は kak-u/kak-i-te/kak-i-ta のような母音挿入(-i-) や kaw-u/kaw-te (→kat-te)/kaw-ta (→kat-ta), tob-u/tob-te (→ton-de)/tob-ta (→ton-da) のような形態上の変化（撥音化，促音化）が起こるとここでは考える。

ョンを明らかにすると同時に，言語間のバリエーションに説明を求める研究プログラムもまた必要なゆえんである。これらの点もいくつかの問題の指摘と大まかな見通しとに留まることになる。

1. te ø／te-iru

1.1. te ø の二用法

現代語では，後続用言や補助動詞に支えられないテ形は次の二つの分布を持っている。ここで特に注目したい，-te ø で完結する次のA，B用法である。

A. 依頼：「～てください」の「ください」のない形。

(1) ね，食べて。

B. 非難：「しょうがないなあ」という含み。

(2) また，そんなもん食べて …。

いずれの文末も，補助動詞や用言の終止形で補うことは可能であるが，省略はすべての～テ形で生じるわけではない。省略しても発話が完結することにこのマーカーの本質が備わっていると考えたい。A，B とも二人称の動作に結びつき，発話者（S0）と共発話者（S0’）の関係からなる〈主体間パラメータ〉のダイナミクスで捉えられる現象である。

ここで，〈時間〉パラメータと〈主体間〉パラメータを統合する〈概念(notion)〉パラメータを導入する[3]。出来事の実現を p，非実現を p’ とする〈概念領域〉を（p, p’）で表記する。正確には，（p, p’）は，〈概念〉P の名称が表わす可能性の総体（概ねPと〈呼べる〉ような〈内部事例 occurrences〉（pi, pj, pk, …），P と呼べないこともない〈周縁事例〉，いかなる意味でも P とは呼べない〈外部事例〉（p’i, p’j, p’k, …）であり，単純なケースでは〈内部〉と〈外部〉の二項対立（肯定・否定）にもなりうるが，〈概念〉への適応，不適応は，〈主体間〉で調整していかなければならない動的で柔軟な構築対象である。〈周縁事例〉は，〈主体〉の見方によって，〈内部事例〉にも〈外部事例〉にも属しうる。

また，（p, p’）は，実現/非実現という〈時間〉パラメータばかりでなく，評価すなわち〈主体間〉パラメータにも対応している。その意味で，上のテ形は，p とも，p’ とも言えず，両者を見通す視点（p, p’），〈値〉は決定されてはいないが P = （p, p’）が問題になる分岐位置に視点が置かれている。A（依頼）では発話者（S0）の願望は p（食べる）に向かっているが，p あるいは p’ への移行は共発話者（S0’）に依存しているから分岐点（p, p’）

---

[3] 言語現象を，固有の形式的属性をもつ三つのパラメータ（espace temporel, champs intersubjectif, domaine notionnel）の枠組みで記述し，総合的には〈内〉，〈境界〉，〈外〉からなる〈概念領域〉とその〈事例〉(occurrences)のダイナミックによる〈レフェランス値〉の構築としてメタ言語化する A. Culioli の発話理論に基づく説明を試みる。しかし，「理論の適用」が目的なのではなく，理論の光のもとに言語現象を発掘し，異質な現象の間の関連を探ることに関心を求める。メタ言語の使用は最低限に押さえ，注釈やパラフレーズなどの直観的理解によって論を進めていく。

にいることになる。逆に，B では，事実上 S0’ が（食べた）を既に選択してしまっていることを確認した上で，S0 は分岐点に立ち戻り p’ の可能性を遡行的に望んでいる。事実としての実現と，S0 の評価（承認）の両方を考慮に入れないと事実レベルでの実現/非実現だけでは裸のテ形の十全な理解は成り立たない。S0（発話者）/S0’（共発話者）の対立軸をバネにして，S0 が可能性の位置（p, p’）から，p あるいは p’ の一方に優位を与える働きをその本質と見たい。

ここで強調しておきたいのは，事行の時間軸上での生起（存在条件）と主体（S0, S0’）が与える評価・承認（質的条件）は同じ程度に重要で，事行の成立の有効性に関わっている点である。この意味では，「p は起こらなかった」，「p は（あったが）評価，承認を受けなかった」はいずれも〈概念領域〉(p, p’）の外部（否定）領域 p’ に属していると捉えることができる[4]。

以上の考察を踏まえ，テ ø 形を次のように表示することができる。S0/S0’ 間に値選択の対立要因（相手が望むかどうかわからない，相手に同意できない）があり，S0’ に依存，対立する S0 は値決定ができないので，決定以前の位置（p, p’）から p あるいは p’ を臨んでいる。〈主体間の調整〉という課題を抱え，S0 は p あるいは p’ の選択，承認を得るまで一歩下がった位置で「待機中」ということになる[5]。

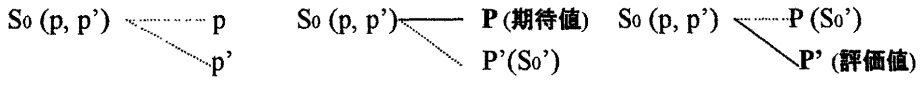


図 1 テ　　図 1 a テ：依頼　　図 1 b テ：非難

1.2. te ø から te-iru へ：値の選択と分岐点の残存

1.2.1. テイルの主要３用法とスキーマ

テイルは，テにイルという補助動詞が接続した形だという点を徹底して考えてみたい。テが上に規定した〈値〉決定の「待機中」をマークするとしたら，イルはどのような働きを追加しているのであろうか。周知のように，テイル形は動詞の語彙的性質によって大きく A. 動作継続，B. 結果状態を表わす用法があり，さらに語彙的性質に関係なく C. 経験・経歴[6]

---

[4] 他にも，「p は（あったが）結果が出なかった」（事行が限界点に達していない）は質的条件から〈周縁領域〉p’ とみなすこともできる。

[5] A（依頼）では，p’ にいる S0’ を，S0 が希望する P の位置に移動させること，B（非難）では p が S0’ により決定されてしまっているが，それを承認しない S0 が事後的に振り出しの位置から p’ を見るようにと S0’ に喚起している。

[6] 白川他（2001），pp. 82-89. が採用する「経験・経歴」という名称は人間について当てはまるが，(5b) のようなモノについての認識にはふさわしくない。しかし，モノにも「経歴」という名称を与えることを取りあえず受け入れておく。井上（2001）は工藤を受けて，タに置き換えると意味が変わるどうかという別の基準によってこのタイプの用法を２分類する（後述）。

を表わすことが観察できる。

(3) 太郎は本を読んでいる。(A)
(4) お皿が割れている (B)
(5a) 太郎はもう/2日間でその本を読んでいる。(C)
(5b) お皿は3日前に割れている。(C)

テイルを論じる際の一つの問題は，発話時までの動作や結果状態の「継続」という連続 (A, B) と (5a/b) に代表される発話時との非連続にある乖離であろう。英仏語などの観点から見れば一見矛盾した用法をどのように統一して理解したらよいのだろうか。C用法ではタ形への置き換えも可能だが，言語が表している〈値〉は異なるように思われる。

A/Bの用法については基準となる発話時に，動作やその結果の〈値〉p が直接確認できる。しかし同時に，進行中の動作や結果は未完了であるから発話時以降に中断する可能性（例(3) では，「読書」は継続する (p) かもしれないし，中断する (p’) かもしれない）も視野に入れる必要があるし，開始点以前も想定できる。すなわち p であっても良いのにそうではない中立点 (p, p’) がいつでも潜在的に内在していると考えられる[7]。このように，テイルの中に存在するテを意味構築過程の問題として再解釈し，発話時に実現された値 p だけでなく，開始以前あるいは発話時以後の中立のポジション (p, p’) とのペア表記 (p & (p, p’)) で表わされるという仮説をここで提示したい。中立のポジションとは，p ではない (=p’) というだけではなく，p あるいは p’ への可能性を保存した潜在的状態のことである。テイルが開始点や終点を持たない状態動詞とは相容れないことを考えると，テイルの変化前後，すなわち「まだ～でない」や「もう～でない」という状態（下図2の破線 (p, p’)…… p’ に対応）の必要性は自ずと理解できるであろう[8]。以下の図示では，p は S0 によって担われるが，(p, p’) は Ti（発話時後，事行開始前）の可能性でありそれを担う主体はない。しかし，p と (p, p’) に関与する項のバリエーションが C の用法を含め，A, B に還元できない以下でとりあげるテイルの多様な用法を生んでいると思われる。

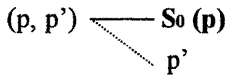


図 2 テイル (A, B [連続] 用法)

[7] 語彙的意味から，事行が非可逆的な例 (4) では，「割れた」ものは元に戻らないから経験的には結果の中断は想定できない。しかし，変化の臨界点以前は「割れる」性質 (p, p’) を持っていたが「割れて」はいなかった (p’)。

[8] 状態動詞としては，イル、アル，デキル，要ル，などが挙げられる。しかし，九州方言では「会議がアッテイル」(=「会議をやっている」) がある点にも注意したい。また，「(泳げないって言ってたけど) 泳げているじゃない」については，F. Dhorne (2002) の考察を参照。どのような条件でも (p, p’) 構築が不可能な，純粋な「状態動詞」は限られてくるのかもしれない。

では，点的事行とみなされる(5a/b) はどのように表象されるのか。「出来事そのものが発話時に確認されなくても何らかの意味で発話時との関わりがある」という文法書の記述は直観的には理解できる。積極的にこの点を支持しようとすれば，文脈の注釈とそこから引き出される形式的特徴を本論の主張の枠内で示さなければならない。時間限定の表現（昨日，2日間で，3日前…）が事行限定の唯一の基準であるなら，タの選択が適切ということになるだろうが，テイルには，時間軸上での限定よりさらに上位に何らかの根拠に基づく S0 による断定という解釈が浮かびあがってくるように思われる。

1.2.2.「記録」と「総括」

この問題についての最近の総括的な研究である井上 (2001) は，点的に表象できるテイルをタに置き換えられない「記録」用法とタに置き換えられる「過去的」用法に分けている。

(6a) 甲：乙さん，この間『…』注文されましたね。
乙：え？そんな本注文したっけ？
甲：(注文のハガキを見せて) これ乙さんの字ですよね。
乙：本当だ。確かに先月注文している／?? 注文した。[記録用法]
あ，そういえば，何かそんなタイトルの本注文したな。

(6b) このところ世界各地で著名人が相次いでなくなっていますが，日本では，現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる2月20日になくなっています / なくなりました。[過去的用法]

井上は「出来事が実現した経過が具体的に把握」されていなければタが使えず，(6a) は，「記録でみるかぎりは‘注文した’ことになっているが，自分ではそのような記憶がないと『注文した』とは言えず，(…)『注文した』(破線参照) と言えるのは，‘注文した’時のことを思い出した後である」という説明をしている。これは，本稿の見方に従えば，発話者の躊躇を表わす (p, p’) の中立的観点（注文したかどうか定かではない）を温存しながら「記録」あるいは「証拠」が示すところに基づいて p（注文した）の観点を前面に押しだした結果，テイルが現われると再解釈される[9]。

また，(6b) タイプについては，「総括主題」が個別の出来事の背後にあるとするオリジナルな見解を井上は展開している。すなわち，「著名人の相次ぐ死」を「総括主題」とし，「武

[9] 推理小説のテイル（犯人はここで食事をしている）は，S0 が完全には確信できないというニュアンスが読みとれる場合と，動かぬ証拠から断定しているので S0 の恣意性や主観性は一切入らず断定に間違いがないという確信に満ちた場合とがあるが，これは主観性をどう解釈するかの問題に過ぎない。

満徹の死」をそれに従属する一事例として述べることで「発話時以前の出来事を発話時と関連づける」というわけである。これも，明示化された文脈それ自体には同意できるが，「発話時と関連づける」という井上の論点を本稿の枠組みから考えれば，むしろテイルの背後にあり（p，p’）で表記される「待機（保留）」の側面が考慮されてしかるべきということになる。では，この場合（p，p’）は何に対応しているのか。印象としては，「武満徹の死」はS0 の強い主張と言うよりは，客観的に述べられている感じを受ける。井上の主張するように，確かに「一事例」が述べられているに過ぎず，S0 の真に述べたいこと「(…) の逝去」（ただし（　）内は著名人）を p と置けば，「武満徹の死」はその一事例 pi であり，井上の言うようにこの発話は pj, k, …（有名人 pj, k, …の死）を追加する可能性を保持していると見なせる。S0 の主張はあくまで「有名人の逝去」であって，代入値は「武満徹」でなくてもよかったのである。従って，p（= pi）は確かに断定されているには違いないのだが，潜在的な（p，p’）も含意され，pj, k, …が p’ j, k, …から選別されるべく「待機中」であり，p と（p，p’）の両者があわさって初めて S0 の発話の総体的「意味」が理解できるということになる。

(6a) の「本の注文」にせよ，(6b) の「武満徹の死」にせよ，一方では発話者が過去時での成立を断定していることに違いはない。しかしこの断定は，どこかしら条件付きであったり，どこかに保留が含まれていたりするという印象に重要性を与え，解釈したい。発話時に直接関係する「進行」(A) や「結果状態」(B) 用法も，焦点化されている進行中の出来事や結果状態の成立（p）の外にある事態（p，p’）への関心が活性化されない状態で観察できるが，(6a/b) のようなタイプでは中立値（p, p’）が主体間関係や概念領域のパラメータの導入によってむしろ活性化されていると解釈できる。テイル形は，時間軸上のパラメータだけでなく，主体間関係のパラメータ（なるほどあなたのおっしゃるように「注文してますね」）や概念のパラメータ（「武満徹の死」以外にも，私の言いたいこと（有名人の死）を示す事例はある）を導入し統合していかないとテイルのカテゴリー横断的働きの全体像を捉えることはできない。

C 用法 (5a/b) の例に戻り，思いつく範囲でコンテクストを補ってみよう。

(7a) 甲：太郎，きょうの話題，やけに詳しかったね。
　　乙：うん，あの本，もう読んでいるみたいだよ。
(7b) 太郎の読書力はすごい。あの厚い本をたった二日で読んでいる。
(8a) 女中の証言によれば，皿は三日前に割れているということです。
(8b) あっ，お皿が割れている。どうしたんだろう。

(7a) は「本を読む」(p)，だから「話題に詳しい」(q) という推論連鎖を通して p（本を読んだ）が断定されるが，同時に相手の疑問（やけに詳しかったのはどうしてか）を配慮す

る形で（p, p’）が S0 の観点から導入されている[10]。この場合，q を安定させる値を確定出来ずにいる S0’に対して，S0 が値 p を取りだしてくる。(p, p’）と p のペアは主体間関係のパラメータが関係している。

(7b) は井上の (6b)（総括的主題）と，(8a) は (6b)（記録的用法）と同類であろう。(8b) では事実確認の後の「どうしてだろう」によってことの次第の不明なことが分かり，「記録用法」のうちの「記録」が不在の場合と考えられる。この場合，S0 に事実確認の意味での p はあるのだが，事情がわからず納得できないことからくる概念上の不安定（p, p’）もあることになる。

1.2.3. マダ～シテイナイと否定の位置

テイルについてもう一つよく問題になるのは，モウシタに対するマダ～シテイナイに表われるテイルである。

(9a) 甲：もう，レポート出した？
　　乙：うん，もう出したよ。／いや，まだ出していない。

否定がテイナイになる理由は，ここまでの考察によってはっきりしてくる。p’（レポートを提出しない）ことの選択は，これから出す可能性（意図）の言及（p, p’）と対になっているのである。乙の返答を「出さなかった」とすれば最終的に「出さなかった」のであり (p, p’）の可能性は以後排除される。逆に，レポートは，いったん出してしまえば二度と提出する必要はない，すなわち p の選択がなされた上は (p, p’）のポジションに遡行する必要はなくなる，従って「出した」とタが使われる。にもかかわらず，次のような文脈では「出している」が可能である。

(9b) 甲：もう，レポート出した？
　　乙：ぼくは出してるけど。

ここで関与的なのは「ぼくは」にある対比であり，「他の人のことは知らないけれど」という注釈から読みとれるのは，「他の人」についての (p, p’）の判断保留だろう。

否定の位置について，一言述べておきたい。te-i-nai はマーカー連鎖の通りに概念領域の値へのアクセスがなされていると考えられ，図示すれば (p, p’）[te-] → p [-i-] → (p, p’）[-nai] のようになる。最後の否定操作で，矢印を逆方向に進み再び (p, p’）への位置に戻る。これを，ナカッタというタ形の否定と比較してみると面白いだろう。この場

---

[10] (7a) は人称を変えた「君，きょうの話題，やけに詳しかったね。」「うん，あの本，もう読んでいるからね。」も可能である。断定の保留は人称の違いによっても生じることについては後述。

合は，否定にタが後続する形式になる。選択された否定の値にタがなんらかの働きを追加している（dasu + nai + ta）ので，出シテイナイとは否定の位置が異なっている（dasu + te + i + nai)。肯定 p と否定 p’ は，ともにタのスコープになりうるということがわかる（タについては，2.以下参照)。

1.2.4. 発言・思考動詞，非現実仮定，テイル/テイタ

他にも吟味すべき，テイル用法がある。ここでは，主語に対する S0 の距離がテイルの引き金になっていると思われる発言・思考動詞３人称の例と非現実仮定に出現するテイルを見ておく。

(10a) 田中氏は最近の著書『…』で次のように述べている／?述べた。
(10b) (私は) 前章で次のように述べた／? 述べている
(11a) 父は死ぬと思っている。
(11b) 父は死ぬと思った／思う。
(12a) ハイジャックがあったとき，私は飛行機に乗っていた。
(12b) 彼の電話がなければ，私は墜落した飛行機に乗っていた。

他人の引用をする場合は，「～と述べている」(10a)，「A 氏は～と言っている」のような形がよく出てくる[11]。もちろん，「述べた」や「言った」も不可能ではないが，引用者が被引用者や引用内容に距離を取る場合は，やはりテイルであろう。「述べた」は，引用者自身が引用内容に積極的に加担する勢いを与える。従って，(10b) ではタがふさわしく（テイルも不可能ではない)，他人の論は自分の論を進める上での材料に過ぎない印象の (10a) のテイルとは大いに異なるのである。

(11a/b) は寺村秀夫の指摘である。「思っている」(11a) は「父が思っている」であり，「思った」や「思う」は，「私が思った/思う」になるという解釈上の違いがはっきりとしている。「思う」は主観述語であるから一般的には３人称表現になりにくいが，ルやタにはない二重の基準点がテイル (11a) では得られ，S0 にも (p, p’) のポジションを与えることができる。(11a) は「思いこんでいる」の解釈 ((p, p’) → p’) に傾くが，S0 の立場をはっきりさせないで距離を置くことも可能だろう。また，「思っている」の主語を「私」に置き換えてみると，「私は…と思っている」は「私は…と思う」よりも断定を避けた言い方に感じられる[12]。その場合，S0 は二重のステータスを持つことになり，３人称の場合 (11a) と比較されることになる。

---

[11] フランス語では，複合過去ではなく「状態」や「継続」を表すとされる半過去 imparfait がよく用いられる。半過去の不変スキーマは，テイルのペア表記 (p & (p, p’)) に類似したペア表記による把握が可能である。
[12] 公的な場で，政治家などが「～と思っております/考えております」という発言をするのをよく耳にする。

「飛行機に乗っていた」が実際のことかどうかの違いが（12a/b）にはある。なぜこのような両極端が同一形式で表現できるのか。仮想空間においては p（飛行機の乗客）が仮想されつつ（従って，p’ ではない），同時に現実の時空間では p’ （乗客ではない）ことが認識されている（従って，p ではない）。ここでは，仮想空間 p と現実空間 p’ はお互いに排除しあう関係にあるが，テイタのタによって p に力点が置かれる（タの不変スキーマ４は，2.1.に示す）。S0 は（p, p’）のポジションで仮想と現実を両方眺めていることになる。テイタの連続用法（A, B）は，基本的にテイルと同じでペア表記（p & (p, p’)）になる点が重要である。しかし，最後に置かれる -ru と -ta の違いによって，テイタの方に対比意識が生じやすいのは，非現実仮定に観察される現象と相似している（さっき泣いてたカラスがもう笑った）。

1.2.5. 不変スキーマとバリエーション

最後に，テイルについてのここまでの議論をまとめておく。様々な用法に共通するテイルのスキーマは，基準となる状況（例えば S0, T0）における値 p の確定と，別の基準状況から見た p の可能性，すなわち分岐（p, p’）の二重の関係の構築にある。今，S0 の位置だけに注目すると次の３種類のバリエーションが可能であろう。[A] S0 が p にある（発話時までの動作や結果の連続など），[B] S0 が（p, p’）にある。外的証拠（Sx）に基づいて p が主張される「記録」用法，発言・思考動詞で３人称（Sx）に p を割り当てる場合，非現実空間（Sx）と現実空間で p と p’ の両方の値を展望するときなど），[C] S0 が p にも（p, p’）にもある場合。例えば，「総括的主題」用法では一事例を p とするが，他の事例への配慮の観点からは（p, p’）への目配りもある。

ここまで扱っていない他のテイルの用法が同じ枠組みで説明できるか，できるとすれば，それぞれの位置が何に対応するか，[A]，[B]，[C] のバリエーションの分類は妥当か，などの問題はさらに検討されるべきで課題である[13]。

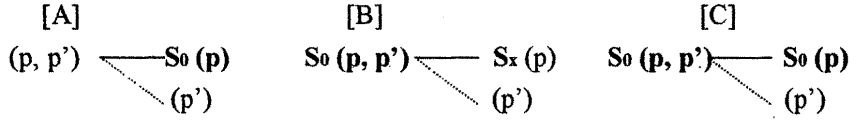


図 3　テイル：バリエーション

[13]テイル形のみで現われる動詞（いわゆる金田一の第四類）を F. Dhorne (2002) は語彙的意味から「判断する主体」が常に背後にあるとしている。(1) 項の関係：沿ッテイル，面シテイル，似テイル，(2) 最上級：ソビエテイル，優レテイル，(3) 評価：ノンベンダラリトシテイル，大人ビテイル，自惚レテイル。形容詞でも「お優しくていらっしゃる」のように尊敬語によってテイルが可能になることにも注意したい。

2. ル／タ

以上のテイルの特徴づけを見た上で，タとルの記述に移ろう。純粋に接続形式の観点[14]からすると，タはむしろテと同一パラダイムに置かれてしかるべきであるが，タが発話文の最終位置を占め発話者の態度決定を預かるのに対し，テは様々な補助動詞（テクル，テオク，…）に支えられたり他の用言（…テ…シタ）を従えたりすることで初めて発話が完成するという点に違いがある。

概念領域(p, p’)の上で，タは p を選択し p’ を排除するマーカーであると規定する。一般的に主張されている時間軸上の過去や未来という概念はタとルの本質とはしない。しかし，時間軸の領域に，(p, p’) による表記を翻訳することはできる。すなわち，「過去」の出来事は値を確定できるから p を選択すれば，p’ が当然排除され，p’ を選択すれば p は排除される。一方，「未来」の事象は値を確定できない，つまり p を選択しても p’ は排除しないのでタは用いられない（*明日，雨が降った)。ルは積極的に他性（p’）を考慮しないこともある[15]。さらに，事後的に p’ を随意的に導入する（排除しない）ことも，その反対に排除すること（× p’）も不可能ではない。

以下，検討したいのは発話時に関連する「ムード的タ」の用法で，2.1.「発見」のタと「思い出し」のタ，2.2. で「感覚・感情」のタをルとの対比で見ていく。最後に，2.3. 語りの（テイ）ル/タの交替現象を解釈してみる。

2.1. 発見のタと思い出しのタ

(10a)（探し物をしていて）あっ，ここにあった。[発見のタ]

(10b)（突然気づいて）あっ，こんなところにさいふがある。

(11) そういえば，明日会議があった。[思い出しのタ]

井上（2001）は，「日本語では発話時以前のある時点で観察された（体験された，認識すべきだった）状態 p を発話時における同一状態 p から切り離して独立に叙述することが容易である」という原則から，いわば「過去」への意識遡行として，すなわちタ全体を規定する「過去」を表わす用法の一環として「発見」のタや「思い出し」のタを説明している[16]。

この説明は「発見」や「思い出し」のタについて，取りあえず納得できるように思える。

---

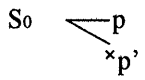
[14] 子音語幹の接続でも形態分析を行えば共通性を示すことがわかる（注２参照)。タはテ + アリを語源としている。

[15] 他性は，対象の他性であると同時にそれを認識する主体の他性でもある。真理や習慣を表わす文は，基本的に人々の共通認識や時間の試練を経た認識に基づくため，他性の考慮がなくなると考えられる。しかし，他性の導入が絶対不可能というわけではない。例えば，「それでも地球は回っている」（ガリレオ）のテイル形は「真理」を絶対値として述べているのでなく，「地球が回るのか太陽が回るのか」という争点を背景化した発話であることにも注目したい。

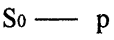
[16] 基本的に，金水（2000)，定延（2001）も同一の立場で，筆者の知る限り，森田（2001）が非過去説でタのムード性を主張している。結論に至る議論の道筋は同じではないが，本稿の考え方は，どちらかといえば森田の説に近い。

しかし，(10a) について，「過去のある時点で認識すべきだった状態」や「情報の登録時点（過去）へのアクセス」（定延）をマークするタが，一体何を「認識すべき」で，何を「登録」していたのかを問うてもよいだろう。(11) については，「明日会議がある」という話者の「認識」が過去時に「登録」済みであると言ってもいいが，(10a) については「探し物がここにある」という視点は，事後的にしか出てこない。「あっ，ここにあった」と言う話者は，果して過去に遡って「ここにあった」ことに気付くべきだったと認識しているのだろうか。むしろ現在の認識こそが前景にあり，たとえ過去の「認識」が前提されているにしても，それは話者の直接の関心事ではなく背後にあるというのが正確な捉え方なのではあるまいか。例えば，「あっ，バスが来た」と言うとき，待っていた「バスの到着」が，今この瞬間に「実現」した痕跡としてタを捉える方が，過去時への「意識」の遡りとして捉えるよりも直観に即応しているように思われる。つまり，話者にとって，〈概念領域〉pi, j, k, … (= 探している物が今この瞬間にどこ（Li, j, k, …）にあるかわからない）を前提としてスカニングがあった後，特定の値 px（ここにある）がタによって選択されたと考えるべきではないか。値の不確定から確定へ，適切な値の特定（px = p）とスカニングの対象となった他の値を不適切であるとし排除する（pi, j, k, …= p’）という流れがタのオペレーションなのではないか。

(10b) の突然の気づきの文脈では，排除する他の値（発見物が Li, j, k, …（場所）にある）の構築はない。「あっ，バスが来る」は，バスを待っていることを特に含意しない。従って p（バスが来る）のみが発話者によって捉えられ，待っている間に確認される（p, p’）→ p’（バスがまだ来ない）は構築されていないから，当然，排除の対象にもなっていない。以上の考察から抽出できる，タとルの不変スキーマは次の通りである。



[図 4 タ]



[図 5 ル]

二点補足する。タの否定形ナカッタは，否定（p’）を選んだ後，タによってこの値を確定する（p への経路を閉ざす = ×p）ことに対応していると説明できる[17]。ルは，既に述べたように，ある値（肯定であれば p，否定であれば p’）を選ぶだけで積極的にもう一つの経路に言及することはしないので p’ の存在は基本スキーマには入っていない。しかし，p を選んだ後に p’ の可能性に言及したり，別の視点から積極的に p’ を導入したり，逆に排除したりする（×p’）ことは周りの文脈次第では可能になる。

---

[17] 分岐の明示と選択のメカニスムは，～シタ方ガイイという表現に端的に表わされている（～スル方ガイイも可）。「方」は必ず選択肢を前提とし，「いい」は複数の中から主観的に一つを決定し評価している。シナイ（*シナカッタ）方ガイイの分布の違いは，否定形は概念領域（p, p’）への言及を通してしかなされないという肯定形との非対称的関係に由来するように思われる。

2.2. 感覚・感情（内的意識）のタ

2.2.1. タ/テイル

(12a) あーあ，お腹がすいた。

(12b)*あーあ，お腹がすいてる。

(13a) ねえ，お腹すいた？

(13b) ねえ，お腹すいてる？

(14a)*（ホームレスの人を見て）あの人，お腹すいたみたい。

(14b)（ホームレスの人を見て）あの人，お腹すいてるみたい。

(15a)（飼い犬を見て）チャピー，お腹すいたみたい。

(15b)（飼い犬を見て）チャピー，お腹すいてるみたい。

現在時に言及する感情・感覚表現のタというのは，他者が断定を与えにくい主観的（個人の内的意識の）表現で，困ッタ（弱ッタ，マイッタ），驚イタ，分カッタなどが挙げられる。金水（2000）は，このタイプの表現について，「シタはシテイルに換えると，表現される段階（時間的位置付け-引用者注）としては同じであるが，シタが持つ緊迫性，当事者性が大幅に薄れ，第三者的な視点からの冷静な報告という意味合いが強くなる」と述べている。実際，1 人称について，「お腹がすいている」は言いにくいが，(14b) のような文脈で疎遠な第三者についての発話としては適切である。ただし，他者については断定を与えにくいのでミタイなどの付加が必要になる。

「私」についてタが問題ないのはなぜだろう。ここでも金水は，「反省的に振り返る」タ（もう，昼ご飯は食べた？）と「生々しく伝える」タ（あ，バスが来た，さて，困ったな）の違いはあるものの，両者とも「限界達成〈後〉」に視点があり，出来事の「過去」という点に変わりはないとしている。しかし，「あ，バスが来た」になぜ「緊迫性」が生まれ，また確認と発話が「同時」でありうるのか。感情・感覚表現では３人称にタが馴染まないのはなぜなのか。このような問題の説明は，出来事とその確認の前後関係だけからは出てこないように思われる。一般化の結果，現象の多様性や特殊性などのバリエーションを説明するパラメータをもたない理論はこの意味で，何か欠けているのではないだろうか[18]。

では，p の選択と p’ の排除という本稿の観点からは何が出てくるだろうか。テイルが p の選択と（p，p’）の保持の結合で一般化され，S0 の占める位置によってバリエーションのパターンが派生されたこと（1.2.5.）を思い出せば，説明は自ずから出てくるように思われる。内的意識表現を，言語表現能力を備えた３人称に用いると p’ の排除ができないので

[18] 金水は，「パーフェクト相」を本義としここから「過去時」の意味を派生させるべきか，その逆の方がよいのか，それともタを多義的とみる立場（工藤）がよいかの３通りの説明の方向性がありうることを示している。本稿は，「パーフェクト相」も「過去時」もさらに抽象的なスキーマの現れ方の一つであり，「プロトタイプ」からの「拡張」とはみなさない。

ある。なぜなら，S0 になれる３人称は常に p’を発話する可能性をもつからである。この意味で，飼い犬の例（15a/b）は興味深い。この場合，意志を表明できない乳児と同じように，S0 が究極的判断者なので当事者の p’を考慮する必要はない。また，２人称の例（13a）は，疑問形なので S0（質問者）は値が確定できないから（p, p’）の立場を取り，p か p’か二つに一つを選ぶように相手に要求するだけなので，タは S0 の断定には繋がらない。

ところで，（12b）では不可だった１人称の「お腹がすいている」を適切な発話にしようとすれば，例えば次のような文脈化が考えられる。

（12c）お腹がすいているから，お母さん早く帰ってきて。
（12d）お腹はすいているけど，もうちょっとで終るから…。

（12c/d）でタを用いることも充分に可能ではあるが，断定の調子がやや強いように感じられる。テイルに固有の二重の位置（p &（p, p’））のうち，（p, p’）の位置は，後件の「早く帰ってきて」や「仕事を継続する」（q）の存在によって生じてくると考えられる。形式化すれば，（12c）では p（だから）－ q という発話は，p’（なら）－q’と連動して機能している（お腹がすいていなければ，わざわざ早く帰る必要はない）。（12d）では，「p だけど q」によって p － q’（空腹なら仕事を切りあげる）が一般的に認識され，p’はむしろ q と結びつく。いずれの場合も，p–q が発話の眼目であろうが，p’－ q’や p’－ q の可能性を視野に入れているので，「空腹」が主張されていると同時に分岐点（p, p’）の定位と関係構築が背景にあると考えられる。

2.2.2. 君，それは〈困る〉よ。

「すく」は，アスペクトの上で状態変化を表わすので，現在時の結果状態にはテイルが用いられのが当然であり，ル（お腹がすく）は未来時に言及することになる。にもかかわらず，「あー，お腹すくー」という表現で現在時に言及する発話も不可能ではないように思われる。感情表現では，「君，それは困るよ」はよく聞かれる発話文である。同一文脈で，「困るよ」を「困ったよ」と言い換えることはできない（cf.（そんなに言われちゃ）まいるなあ≠（そんなに言われちゃって）まいったなあ）。「困る」と「困った」はどのように発話条件が異なるのであろうか。

困る/困った（まいる/まいった）のペアを見る限り，2.1. で論じた発見のル/タの出現条件と基本的に同質であると思われる。例えば突然の依頼や要求に直面しての最初のリアクションは，「そんなー，困る（まいる）なあ」であろうし，「うーん，困った（まいった）」は，依頼や要求をいったん受けとめた上での二次的レアクションという印象がある。前者（ル）が自分が困るという意味にしかならないのに対し，後者（タ）は自分が困る場合に加えて，

相手に対する同情の文脈も可能であることも注目してよいだろう（それは困りましたね）[19]。

以上の観察から，感情の存在構築（不在から存在への変化）がルでマークされ，存在についての質的評価（判断は確かに間違いがない）がタでマークされるという結論が引き出される。存在構築 p に否定的な要因は介入しない。いわゆる現象文に否定形が作れない（あっ，鳥が飛んでる！/*あっ，鳥が飛んでない！）のはこのためである。逆に評価のある場合は，発話者の概念領域（p，p’）でのスカニング操作が想定される。この結果 p が選択され，p’ が排除される。「うーん，困った」は「うーん」の部分に「あれこれ考えてはみたが…」という前段階のスカニングの痕跡を読みとることが可能であろう。

ルの場合，発話者が一次的にルを選択しても，事後的にこれを訂正する p’ を導入することは妨げない。未来に言及するルは，視点を変えれば「もしかしたらそうじゃないかもしれない」ということになるだろう。他方，タは最初から p’ を排除しているので再度 p’ を導入することはできない。「そんな，困ります」に対する「うーん，困りました」の違いとして，前者は例えば何らかの依頼を受けたときの儀礼的な表現でもあり，まだ交渉の余地があるという印象を与えることもあるのに比べ，後者は本当に「困っている」という感じがする。

p’ の位置づけは，「分かります」と「分かりました」の違いを理解する上でも示唆的である。「分かる」は相手の言わんとすることを理解するという解釈もありうるのに対し，「分かりました」は，それに同意するというもう一歩踏み込んだ了解になる。前者が「あなたの言いたいことは分かるけど同意はできない，納得できない」という方向に進めば，「分かるけど分からない」という言い方も可能だろう。すなわち二次的に p’ を導入することができるのである。「発話行為の現場で起こる出来事に関して，感情的評価をくだしたり，理由を問いただしたりするとき」に用いられるルも同じ方向で解釈できるものであろう[20]。(16a/b) はいずれも既事実なのだが，発話者には「よく分からない」。「存在」はあるが，評価は否定的ということになる。

(16a) 君，こんなときによく寝るなあ。（「寝る」は既事実）

(16b) どうして，私の後をつけるんですか。（「つける」は既事実）

より詳細な考察をすると，「存在」レベルが活性化するか「評価」レベルが活性化するか，

---

[19] 厳密に言えば，「それは困る（まいる，弱る）ね」で相手の困惑を代弁することは可能かもしれない。その場合，「私」と「あなた」の区別をなくし，相手になりかわった発話になり，自他を維持したまま相手の困難な状況に理解を示す「それは困った（まいった，弱った）ね」とは異なるのではないか。また，どれだけ他者の感覚・感情についての断定を排除するかの「主観性」の問題は語彙ごとに異なるであろう。「まいる」は「主観的」，「弱る」はより客観的な印象を与える。１人称では，「まいる！」に対して「弱る！」は言いにくい感じがする。逆に２人称解釈では，「それはまいりましたね」よりも「それは弱りましたね」の方が受け入れられやすい気がする。タとルの使い分けに関して，「そんなことして，〈驚く〉じゃないの！/ *そんなことして，驚くø！」と「あー，〈驚いた〉/ *あー，驚いたじゃない」の対比も考察に値する。

[20] 金水（2000）から引用した工藤（1995）の観察であるが，例に少し変更を加える。

p’が一時的構築か二次的構築かに応じて，語彙ごとに様々な解釈のバリエーションが生まれるという予測が立つ[21]。

2.3. 語りのタ/ル/テイル

英仏語の世界では，「語りの現在」という現象がよく取りあげられるが，日本語でも類似の現象が観察できるであろうか。考察にあたっては，まず「日常の語り」(S0/S’0 の対立が存在する Benveniste の所謂 discours の発話空間）と「書き言葉での物語」(S0/S’0 の対立がなく，「出来事がおのずと進行する」(Benveniste) 空間，場合によっては，ナレータや登場人物の視点が認知できる）を区別しなければならない。それぞれに現われるマーカーはかなり違っているからである。

2.3.1. 日常の語りのル/タ

この問題について一石を投じた松村 (1996) の一例のみ取りあげ，本稿の論旨に従って解釈する。問題は二点に絞られる。(1) 1 人称の事行はタ，3 人称の事行はルになるのはなぜか。(2)「日常の語り」に必要不可欠と思われるノダ形はどのような理由で現われるのか。

(17) あの一、病院に入院しているっていうことで、それで行ったら、あの一もうかなりね、痩せ細って、もう、こっちから管を通して、ひどいんですよ。喉頭癌ですけど、食事できませんからね。(…) ああ、だめかなあなんて思ってました。けど、元気よくしゃべるんですよね。(…) で、その時、いつもカメラもたないんですよ、で、4枚、4枚残ってるから持っていこうかと思って、持ってったんです。それじゃ、撮ってあげようかってね、撮ったんですよ。で、嫌いなのにね、こう、カメラの方、向くんですよ。(『徹子の部屋』)

破線部は訪ねていった相手の動作(ル)，実線部は語り手の動作(タ)である。このような語りで，逆に，3 人称の行動についてタ，1 人称の行動についてルを用いるのは不可能である。すなわち，3 人称はル，1 人称はタというのが一般的に言えることになる。この規則性は 2.2.1. で論じた感覚・感情表現の分布を思い出させる。付け加えれば，(17)のような話し言葉のスタイルから日記のような書き言葉のスタイルに転換すれば人称間の差異を消すことも不可能ではない。

(18a) 昨日，田中の見舞いに行った。食事もできないと聞いていたので，もうだめかと思っていたが，意外に元気よくしゃべった。普段はカメラなど

---

[21] 今，そのバリエーションを網羅的に追求する余裕はないが，例えば「君，こんなときによく寝たなあ」(タ形) はどちらかと言えば，(16a) と逆にプラス評価 (感嘆) につながる印象がある。「どうして，私の後をつけたんですか」(タ形) は，「後をつける」という語彙に由来する非難のニュアンスだけではなく事実レベルでの質問も可能で，もっぱら非難の含みを持っている (16b) とは異なるように感じられる。

もたないのだが，たまたまフィルムが４枚残っていたので持っていって写真を撮った。カメラ嫌いのはずの田中が嫌な顔もせずカメラの方を向いた。

(18b) 昨日，田中の見舞いに行く。食事もできないと聞いていたので，もうだめかと思っていたが，意外に元気よくしゃべる。普段はカメラなどもたないのだが，たまたまフィルムが４枚残っていたので持っていって写真を撮る。カメラ嫌いのはずの田中が嫌な顔もせずカメラの方を向く[22]。(…)

(17)と(18a/b)の違いは，前者が話の進行に沿った臨場感にあふれる表現であるのに対し，後者は一つ一つの出来事を区別なく等距離に語っている点にあると考えられる[23]。前者の現場再現的語りでは，「私の理解している出来事」と「予知出来なかった他人の出来事」の区別があるが，後者の内省的語りでは出来事全体が一様に把握される（ただし，タで把握する（18a）か，ルで把握する（18b）かの違いはある）。(17)では，「私」は「あなた」に話しかけることで出来事を再体験しているが，(18a/b) では「私」と「あなた」の区別はなく，出来事の全体は「私＝あなた」が見通している[24]。その意味で，(17)「私≠あなた」の場合，「私」は出来事の流れ全体を知った上で，「あなた」とともに再体験をするという二重の操作を行っていると考えることができる。

ここで，冒頭に掲げた問題(2)を次のように解釈したい。(17)に見られるノダは，「私１」が把握する〈既構築〉の出来事を断定していく[25]。一方，「私２」は「あなた」を前にして出来事を発話ごとに〈再構築〉していく。ノダを担う「私１」とル/タの述定を行う「私２」に「語る私」は分割されることになる。この際，第三者の行動はそのつど「私２」の発話を通して「発見」される新たな出来事（存在述定）となりルがふさわしい。他方，自らの出来事は「選択」の結果生じ（質的評価），「発見」ではないからタで表わされることになる。

経験したことを人前で語るという特異な発話状況に生じるこの区別は，「私１」と「私２」の分裂がない日記体では生じない。１人称に関わる出来事には，日記体では（18a/b）に見られる通り人称の区別に関わりなくタもルも現われる[26]。ルであれタであれ，過去に起こっ

---

[22] (18b) の最後の描写「カメラの方を向く」は話がまだ続くという印象を与える。最後の締めくくりの言葉（例えば，「見舞いに行ってよかった」）を必要とするように思われる。

[23] (18a/b) も「…行った。…しゃべる。…撮った。…向いた。」，「…行く。…しゃべる。…撮った。…向いた。」などのバリエーションは可能である。

[24] 日記は，「私１」の「あなた（＝私２）」に対する語りと考えた上での「私１」＝「私２」の表記である，

[25] ノダを，構築済みの断定前の対象（未定項を含む$_P$）をマークするノと，未定項を満たした上で関係同定をするダの複合とする見方は A. Terada (1998) に明解に示されている。話し言葉ではダが省略されることもあるが，文末の位置によって断定機能は維持される。本稿の論もその考え方に沿っているが，ノダの観察の細部にふれる余裕はない。

[26] 注 22，23 を参照

た出来事を語ることはできるのである。ルについての仮説に述べた p' の不在は，出来事を淡々と語る場合にはわざわざ起こらなかったことについての配慮はなくても〈安定〉しているからという消極的不在のこともあれば，出来事の意外性からくる p の〈不安定〉（「何で p なのだろう？」，「それで，どうしました？」のダロウやタの疑問形が示す）の解消を求め顕在化することもある。タはいつでもそこに話の最終ピリオドを打つことができるが，ルは話の展開に適しているという印象もそこに由来している。

2.3.2. 物語の（テイ）ルと視点

(19) 宗助は先刻から縁側へ座蒲団を持ち出して、陽当たりの好さそうな所へ気楽に胡座をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和と名のつく程の上天気なので、往来は行く人の下駄の響きが、静かな町丈に、朗かに聞こえて来る。肘枕をして軒から上を見上げると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでいる。其空が自分の寝ている縁側の窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。（夏目漱石『門』）

この節では，Dhorne (2000) の取りあげた一例につきのみ考察する。(19)から受けとめることができるのは，前半部タ（胡座をかいて見た，横になった）から後半下線部のル，テイル形への移行によって語りのパースペクティブに変更が生じていることであろう。後半部では，登場人物の視点からあたりの様子が描かれているように感じられる。カメラの移動は，「秋日和と名のつく程の上天気」という判断から始まっているのか，「下駄の響き」から始まっているのかは定かではないが，少なくとも登場人物の宗助にじかに音が聞こえ，風景が見えてくる感じがする。「朗かに」聞こえる，「奇麗な空が一面に蒼く」澄んでいる，「非常に」広大である，という評価の言葉も宗助の判断であるような気がする。とりわけ，最後の文の「自分の寝ている縁側の窮屈な寸法」という表現は，「自分」に内省的視点を与えることができるように思われる。下線部を仮にタ，テイタで置き換えると，本来主観的な知覚（聴覚，視覚）は，上の形容表現ともども，全てを見通すナレータからの客観的な描写という印象になるのではないだろうか。

では，なぜこのような登場人物よりの視点がル，テイル形では可能なのだろうか[27]。タやテイタによる語りは，ナレータが語りの結末に至るまで全てを見通した上で展開する「必然

[27] タ，テイタとル，テイルの対立は必ずしも視点の転換とは結びつかない。例えば，阿部公房『砂の女』の次の一節では，主人公の行動の素早い展開がルで表され，タ，テイタがむしろ主人公の知覚に対応している。以下の例文について EHESS（パリ）で博士論文を準備中の伴映恵子氏にご教示いただいた。記して感謝したい。「男は首をかしげて，新しいタバコに火をつける。ひどく納得のいかない気分だった。立ちあがって，そっと，ムシロの向こうをのぞいてみることにした。たしかに，部屋はあったが，床はなかった。床のかわりに，砂がなだらかなカーブをえがいて壁の向うから落ちかかってきていた。思わず，ぞっとして，立ちすくむ。」この作品の仏訳との比較も面白い問題だが，ここでは論じない。

のロジック」（話が最初から最後まで順序づけられ，安定した継起性によって進行するはずだという思い込み）が支配していると考えられる。読者も物語には始め，展開，終りがあるというつもりで読んでいる。この場合，言わば第三者的な視点から事行は自ずと展開していく。他方，物語という「必然」から自立して，登場人物が先の読めない出来事や状態をそのつど「発見」していくのが，ルやテイルであると考えられる。その意味では登場人物は読者と同じ立場にあり，読者の感情移入を誘うのも容易なのかもしれない。メタ言語を用いれば，一つ一つの事行について，p であって他の動作・状態（p'）はあり得ないということを示すのがタ・テイタであるので，「必然」のロジックに適合する。ル・テイルに対応する事行の「偶然」の出現は，p' に言及しない p として説明されるであろう。いずれにせよ，ナレータや登場人物は，日常の語りの「私」とは違って，出来事や状態を既構築であり既然のことであるという身振りは読者に対して示さないので，書き言葉の物語にはノダは適さない。

3. 何を対照するのか

日仏対照研究は，類似する不変スキーマに共通性があるのか，スキーマのどのようなバリエーションの可能性が考えられるのかに関心が求められる。以下では，主に日仏語での現象の興味深い異同を観察し，いくらかの理論的示唆を行うが，網羅的な記述は目指していない。

3.1. ル，テイルとフランス語現在形

仏語と英語の現在形について論じた小熊（2001）では，時間的位置付けにおいて，無標の現在形には〈境界消去〉や連続化の働きが基本にあり，類似している英仏語での用法のバリエーションは，ある観点（パラメータ）から〈消去〉されている〈境界〉を別の観点から導入する（あるいはその逆に，存在する〈境界〉を無効化する）という点に求められるとした。すなわち，例えば，英語と違って動作や過程の「進行」（日本語では，「今，テレビを見ている」のような場合）を表せる仏語現在形は，潜在的な「始点」や「終点」といった非連続を含むことが可能だ。しかし，光が当たっているのはあくまで時間軸上の各点で実現されている事例（occurrences）間の連続性であり，その意味では〈境界〉を無視することができる。「進行」過程にある潜在的な〈境界〉は，Il *regarde* la télé depuis 2 heures（時間副詞の導入：彼は２時間前からテレビを見ている）や，現在形とある意味では交替しうる紆言形 être en train de を用いた Il *est en train de regarder* la télé, ne le dérange pas（テレビを見ているんだから彼の邪魔しちゃだめだよ）のように，連続性の中に非連続性を導入することで得られる。後者の例では，「彼」が人の相手をできる暇な状態にあるかないかについて，S0 は S' 0 と対立するポジションにある。すなわち，regarder la télé の〈概念領域〉に作られた事例に関して主体間の非連続（p/p'）があることが見てとれる[28]。

---

[28] Être en train de + 不定法は，厳密には現在形に置き換えられないから，現在形＋アルファ（イントネーションや il travaille, lui !のような補助要因）で対立構図を作る必要がある。日本語では，「テレビをみているんだよ」のノダ形やヨの働きに注目する必要がある。

一方，英語現在形は「動作・過程の進行」は表せないから，仏語現在形よりも〈境界〉設定の拒否は厳しいということができる。ここで言う〈境界消去〉という考え方は，先に図５で示したル形のメタ言語表記（S0→p）と本質的には同じ内容を表している。〈消去〉は，構築することを前提とした〈消去〉ではなく，二次的に（p, p'），p'，×p' を導入する有標化された現在形の使い方に対するミニマルな用法を指している。その意味では対照的観点がなければ〈消去〉という考え方自体成立しないと言ってもよいであろう。〈境界消去〉というよりは 〈境界不在〉 と述べた方が適切かもしれないが，それでも〈境界〉に言及することになってしまう。繰り返すが，時間軸上，主体間関係の中で特に理由を明示しない限り，現在形には p' を導入する力はない。一方，テイル形の「進行」用法は，図３Ａに確認できるように，S0 は p の位置にあるが，（p, p'）の位置から p' への経路を考慮する余地が基本スキーマとして与えられているので〈境界〉に対する配慮がある。

ある種の移動動詞に見られる「近い過去」用法（J' arrive à l' instant,「たった今，来ました」）は，仏語現在形に固有であり，英語現在形にはない。この使い方では，事行の時間軸上の「成立」はあるのだが，à l' instant や à peine, seulement などの副詞との親和性でも明らかなように，成立した事例は不安定で概念領域では p' の位置を占め，p の成立は二次的に p' を導入する結果になっている。『星の王子様』にある次例を挙げておく。Je *me réveille* à peine … Je vous demande pardon … Je suis encore toute décoiffée …（今，目が覚めたばかり（現在形）なんです。ごめんなさい。髪がボサボサで…）。

「歴史（物語）現在」は，日仏両語に観察できる（日本語ル形とフランス語現在形の類似性）が，出現の仕方はかなり異なる。2.3.1. で論じたように，話しことばでの語りに現われるル / タの交替は人称に関わっているが[29]，フランス語での現在形 / 複合過去形の交替は，「語り口調が軽快になり，流れにスピードがつき，その叙述の中では，事行が一連のもの」になる現在形に対して，「一つ一つの事行の独立性が高い」複合過去形では「話し手は発話時点に位置し，事態を振り返るような形で事行をいちいち現実的なものと認めながら時間的に位置づけていく」という塩田（2001）の記述に集約されるように思われる[30]。一連のまとまりとスピーディーさを特徴とする動的動詞の現在形は，次々に出現していく事行（p）を，発話者の評価（確認や期待値）とは関わりなく，従って（p, p'）を経過することなく存在（p）だけを述定していく。スポーツの実況中継に見られる現在形も同様であろう。塩田は，現在形は「先が待たれるような印象」があり，話に「落ち着きを与えるには複合過去

---

[29] Shioda-Hoshino A.（1998）は，１人称で昔の思い出を語る際のル／タ交替の例を挙げている（La chauve-souris と命名された『日曜喫茶室』，NHK FM のコーパス）。比較的最近見聞きした体験を語る語り手（2.3.1. で論じた「私」の分裂）と，いわば時間によって濾過された経験を語る語り手では，聞き手に対する発話ポジションは異なると思われるが，ここでは深く立ち入らない。

[30] しかし，現在形では「発話者の意識は，事行と時空間にあり，（…）事態が『眼前でおこっているように』映る」という記述は，現在形を買いかぶり過ぎた記述ではないだろうか。展開が速くなることは，「生き生きした記述」には繋がらない。

形の出現が必要」で，「予期を裏切る展開や結論，解決など，話の流れの上での一種の断絶・逆転が生じる」としているが，必ずしも期待とのズレばかりではなく，期待の実現という場合もあるのではないかと思われる。コーパスの綿密な検討が必要であろう。会話の語りでは，場面確認のため状態動詞はしばしば半過去におかれることにも注意したい[31]。物語（小説）における時制交替の問題は，フランス語半過去形との関連で 3.3. で別に論じる。

3.2. タとフランス語複合過去形（passé composé：pc），単純過去形（passé simple：ps）

過去の「点」的事行を表す pc（助動詞 + 過去分詞）と ps は，発話時や発話者（T0, S0）との関連があるかないかで区別されると一般的には認識されている。pc は，英語の現在完了と違って，発話状況に関連する完了だけではなく発話時とは切り離された過去時を表わすこともできる。これを ps の後退にともなう pc の機能拡大とする捉え方もあるが，朝倉季雄『新フランス文法事典』（白水社，2002）では，pc は「話者の記憶に存する事実，体験した事実」との見方を示し，例えば，(1) 孤立した過去の事実は pc でも表せるが，過去の継起する一連の出来事は ps でしか表せない，(2) 同じ事実でも筆者の目撃や体験（小説），現在時との関わり（新聞報道の出だし），あるいはそのような見なし（歴史の教師が教室で教える場面など）によって ps と pc の交替が有意義であるという指摘をしている[32]。タ形は，発話者の介入が明確に認められるテイル形と，「点」的過去時の表現で一部交替する可能性がある（1.2.1〜1.2.3.）ものの，概ね pc と ps の使用文脈に関しては区別することはないと思われる。その意味で，ps が現れない話し言葉ではなく，むしろ交替の可能性のある書き言葉での pc/ps の使い分けを，日本語話者としてどのように理解するかという点に対照的観点からの興味がある[33]。日本語からフランス語への文学作品の翻訳を考えれば，すべてのタを ps で訳すこともできないということになる。文脈や作者（翻訳者）の視点により，どのように pc と ps が使い分けられているかは検討に値する問題だと思われる[34]。

Tamba (2002) は，日・韓・中国語での，Camus の Étranger『異邦人』の翻訳を論じ，い

---

[31] Culioli の例を挙げる。Hier matin, je me lève ; je prépare mon petit déjener en prenant tout mon temps. Je vais dans la salle de bain : il n' y *avait* pas d' eau. J' attends, l' eau revient. J' *étais en train de* me savonner quand il n' y a à nouveau plus d' eau. 「昨日の朝、起きてからまずゆっくりと朝食の支度をしたんだ。それから、シャワーに入ろうと思って風呂場に行ったんだよ。そしたらお湯が出なくってね。待ってたら出るようになったんで、石鹸を使ってたらまたまた出なくなっちゃって。」半過去形は，場面設定と転換に重要な役割を果している。上例で「お湯がある」と思っていた状態から「お湯がない」（第一の下線部）状態へ，あるいはその逆（第二の下線部）という確認の変化が半過去の果す役割であろう。

[32] また ps は，スペイン語の対応形 préterito とは異なる現象をもつようである。例えば，見た映画について尋ねられ，Fenomenal ! Me gustó mucho. 「よかった」という話者の評価は pretérito で表される。山村（1997, 1998），および 2003（本叢書論文）参照。フランス語では，Génial ! Ça m' a beacoup plu. のように pc になる。

[33] 春木（2001a, b, 2002）は，この方向性をもつ興味深い研究である。

[34] 村上春樹の『羊をめぐる冒険』(1982) の翻訳（De Vos Patrick, *La course au mouton sauvage*, Seuil, Points, 1990）は，pc を使う可能性があるにも拘らずタ形に ps があてられていることを Tamba (2002) は指摘している。

ずれの言語においても，pc/ps のような選択の可能性がない過去形（-ta, -eossta, le）が用いられていることを指摘している。カミュは，この小説の中で，現実の出来事を相互連関のない断片として捉えるために，終局点（テロス）に向かって緊密な相互依存性（クロノロジー：「時」+「論理」）のもとに展開する ps ではなく，意図的な pc の全面的使用という斬新な文学的試みを行った。この重要なかたちの選択が，例えば日本語のタ形による翻訳では理解できなくなってしまっている。柳父章の論文[35]に基づきながら，文末タの使用が外国小説の過去形の翻訳から，明治期に人工的に始まり，徐々に文学また広く書き言葉の制度として普及，確立していったこと，しかしながら口語ではネ，ヨなどの主体間関係を調整する発話マーカーが附随しない単独のタは用いられないことに Tamba は注意を促している。タの物語・歴史叙述的使用（過去時制）は，本稿がここまで主張してきたようにタの本質を表すものではない。タには pc とも ps とも異なるアイデンティティがあり，それぞれが不変スキーマとそのバリエーションを持っていることを展望と課題としておきたい。

3.3. 登場人物と視点：半過去の問題

一般的にフランス語半過去（imparfait ： imp）は，小熊（2001）で論じたように，基準となる状況の移動と，移動に伴って状況に内在する視点の転換がある。移動によって作られた新たな状況（R0： 場面/視点）は，しかしながら，移動前の状況（R1： 場面/視点）を排除せずに残存させていると考えられる。この結果，imp は事態を複眼的に眺めることになる。このような「立体視点」の観点から，既例（19）の仏訳を参照すると面白いことが観察できる。

（19）宗助は先刻から縁側へ座蒲団を持ち出して、陽当たりの好さそうな所へ気楽に胡座をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和と名のつく程の上天気なので、往来は行く人の下駄の響きが、静かな町丈に、朗かに聞こえて来る。肘枕をして軒から上を見上げると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでいる。其空が自分の寝ている縁側の窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。（夏目漱石『門』）

（19a ）Sôsuke, qui, un moment auparavant, avait apporté un coussin sur la véranda, s' était d' abord assis en ailleur, bien à son aise, en un undroit qui lui avait paru agréablement exposé au soleil ; puis ayant bientôt rejeté la revue qu' il tenait à la main, s' était étendu du tout son long. Il faisait un temps idéal d' automne et l' on entendait un seul bruit très distinctement, dans ce quartier paisible, celui que

[35] 柳父章，「翻訳で作られた日本語のテンス」，『日本語学』18, 3. 1999

faisaient avec leur geta les gens qui marchaient dans la rue. Sôsuke se faisant un oreiller de son coude, regardait, par-delà l' auvent du toit, un beau ciel d' un bleu limpide, et dont l' immensité contrastait étrangement avec l' étroitesse mesquine de la véranda sur laquelle il était couché. (traduit par R. Martinie)

まず，冒頭の大過去（点線部）で，登場人物の宗助が「ごろりと横になる」までの経過が導入される。ところが，続く下線部の半過去は，必ずしも原文に感じられる登場人物よりの視点を表わさないようである。

「秋日和と名のつく程の上天気なので、往来は行く人の下駄の響きが、静かな町丈に、朗かに聞こえて来る。」の部分は，Il *faisait* un temps idéal d' automne et l' on entendait un seul bruit très distinctement, dans ce quartier paisible, celui que *faisaient* avec leur geta les gens qui *marchaient* dans la rue に対応する。原文の唯一の終止形「聞こえてくる」だけでなく，「上天気なので」，「下駄の響き」（→下駄がなす音），「行く人」（→歩く人）も連動して imp になっている（イタリック部）。さらに「肘枕をして軒から上を見上げると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでいる。」は Sôsuke se faisant un oreiller de son coude, *regardait*, par-delà l' auvent du toit, un beau ciel d' un bleu limpide になり，原文のテイルは仏訳では名詞句に様変わりし，「見上げると」が主文で imp になっている。三番目の訳文も原文のテイル形を忠実には反映はしていないが，「其空が自分の寝ている縁側の窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。」の下線部テイル形に感じられる宗助の知覚は，dont l' immensité contrastait étrangement avec l' étroitesse mesquin (…) と，より客観的な描写の動詞（imp）と主観的な副詞（étrangement）に分離される。

上の翻訳の imp から読み取れることは，客観的な場面（背景）描写であり，登場人物の内的意識だけを表示していることを翻訳から見い出すのはむずかしいだろう[36]。さらに主語の部分に注目すると，「下駄の響き」を聞く不定主語の on は聴覚主体を曖昧にする。次文の主語 Sôsuke（ø 肘枕をして）は原文では省略されていて，フランス語訳では固有名詞表示，ナレータによる全体の視点の優位に貢献することになると思われる。また，後続文は原文では「自分の寝ている」となっている。「自分」は登場人物の内的意識を暗示するように思えるが，仏訳では il であり，ここもナレータによる描写が優位に立つ。原文では宗助へと視点が移る前段階（フランス語訳では動詞が大過去になっている部分）に，「宗助」という固有名詞の使用が一度あるきりで，以下では「自分」まで動作や知覚の主体は省略されている。

一つのテキストだけから一般化をすることは控えるべきだが， imp にナレータの視点から登場人物の視点への転換という役割を付与するためにはそれなりのコンテクスト化の技

[36]小熊（2002）では，Flaubert の *un cœur simple* の「絵画的半過去」の一節を取りあげ「読者は鳥瞰的に出来事の推移を辿ると同時に，登場人物の意識にも立ち会っている」と述べた。

法が必要なようだ[37]。少なくとも伝統的なフランスの小説の語りにおいては，場面描写とナレータの統一視点にかなりの拘束力があり，ナレータから登場人物への視点転換は優先度において従属していると考えられる。日本語では，（テイ）タ形と（テイ）ル形が基本的に対立し，前者が場面，状況の描写，後者がもっぱら視点転換に用いられることを見ると，imp は場面設定（転換）と視点設定（転換）の区別をしない中立的な形であるということになる。またフランス語では，登場人物の内的発話を表す現在形を使うための条件も限定されるようであり，この点も調査が必要であろう。

結論に代えて

日本語のテ/テイル，ル/タ形の対立を中心に，〈概念領域〉上で〈主体が取るポジション〉の規定とその配置バリエーションから生じる様々な意味的ニュアンスや用法間の関連を説明しようと試みた。「かたち」があるところには必ず可塑的なスキーマの原形があり，当該言語内で，あるいは異なる言語間で一部交替可能性をなしているように見えることはあっても，決して同一の不変スキーマとそのバリエーションは存在しない。その意味で「かたち」の固有性を徹底的に追求することが理論的な課題となる。類似した「かたち」の間の意味や用法のずれは，それゆえに還元不可能なアイデンティティーの根拠となるべきものである。本稿ではバリエーション自体を捉える記述，不変スキーマとバリエーションを繋ぐ記述の枠組みもまだ充分に示されてはいない。日本語の問題で扱わなかった連体節内でのテイル/タの交替現象，わずかな例からの記述しかできなかった語りでの「かたち」の交替現象についても，言語ごとの特殊性について論じる余地がまだ残されている。

文献

［日本語で書かれた文献］

井上優（2001）「現代日本語の『タ』」，『「た」の言語学』（つくば言語文化フォーラム編），ひつじ書房

井上優，生越直樹，木村英樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照-日本語・朝鮮語・中国語」，『シリーズ言語科学４対照言語学』（生越直樹編），東京大学出版会

小熊和郎（2001）「フランス語『現在形』と〈境界〉の消去」，西南学院大学フランス語フランス文学論集No.42

小熊和郎（2002）「半過去と〈境界〉の消去」，西南学院大学フランス語フランス文学論集No.43

金水敏（2000）「時の表現」，『日本語文法２：時・否定と取り立て』，岩波書店

---

[37] 次の例に見られるように，疑問文や感嘆文，間投詞を伴う場合は明らかに登場人物の視点がはっきりしている。" Etienne, déjà, continuait d' une voix changée. (…) Est-ce qu' il *se trouvait* des lâches pour marquer à leur parole ? **Quoi** ! depuis un mois, on *aurait souffert* inutilement, on *retournerait* aux fosses, la tête basse, et l' éternelle misère *recommencerait* !Ne *valait*-il pas mieux de mourir tout de suite, en essayant de détruire cette tyrannie du capital qui affirmait les travailleurs ? (Zola, *Germinal*)

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間の表現-』ひつじ書房
定延利之（2001）「情報のアクセスポイント」,『言語』12月号
塩田明子（2001）「話し言葉における présent de narration」,『フランス語学研究』第35号
春木仁孝（2001a）「テキスト構成とテンス・アスペクト」『GALLIA』XL号，大阪大学フランス フランス文学会
春木仁孝（2001b）「MOURIRの時制 -「語り」における複合過去の機能-」，言語文化共同研究プロジェクト2000『現代フランス語のテンス・アスペクト・モダリティー』，大阪大学言語文化部
春木仁孝（2002）「フランス語の複合過去 -発話時との関係の類型化に向けて-」，言語文化共同研究プロジェクト2001『言語における主観性をめぐって』，大阪大学言語文化部，
松村瑞子（1996）『日本語の時制と相』，開文社
森田良行（2001）「確述意識を表わす『タ』」,『言語』12月号
山村ひろみ（1997）「ser コピュラ文の pretérito による表出について」『独仏文学研究』47，九州大学独仏文学研究会
山村ひろみ（1998）「préterito による表出のための条件-無生物主語の場合-」『言語文化論究』9，九州大学言語文化部
松岡弘，他（2000），『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，スリーエーネットワーク
白川博之，他（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，スリーエーネットワーク

［フランス語で書かれた文献］
Dhorne F.(2000) "Le point de vue –repère en traduction", in *Equinoxe* 17/18.
Dhorne F.(2002) "Temps et aspect en japonais", in *Faits de langues* 17, Ophrys
Lebaud, D. (2002), *Lingusitique générale et analyse du français*, Université de Franche-Comté, DEA, DEA Sciences du langage, didactique, sémiotique : formule à distance pour l'orientation FLE.
Oguma, k. (1985), "Remarques sur la forme en *te* en japonais", BULAG 12, Université de Franche-Comté.
Shioda-Hoshino A. (1998) "-*ru* dans les récits à l'oral spontané", in *Japon Pluriel* 3, Picquier
Tamba I. (2002) "Le sens unique de la traduction littéraire", Communication à l'université Aoyama
Terada A.(1998) "*No da* et la chaîne d'inférence", in *Japon Pluriel* 3, Picquier